

ケルト諸語文化圏について

HARA Kiyoshi

原聖

ケルトという名称は自称ではなく、紀元前の時代のギリシア人がアルプスの北側に住む人々をさして、こう呼んだ他称である。ローマ帝国の時代は、ガリア（今のフランス）、ブリタニア（イギリス）、ヒベルニア（アイルランド）という言い方が普通だった。ケルトという名称が復活するのは、近代国家の原型ができてはじめる15～16世紀になって、まさに自らの民族的起源探索の中である。フランスの起源がローマに征服されたガリアの民にあり、これがフランス人の起源だという議論がある一方で、ガリアの民の話す言語がフランス語の属すラテン系の言語とは異なるということが自覚されはじめ、ブルターニュなどでは、ケルトこそフランスとは異なる、自らの起源であるという主張が生まれる。この主張のなかでは、欧州でもっとも古い民族が我々ケルト人である、さらには我々こそ人類の祖先に直結する、というような考え方も生まれた。その後、ケルトマニアと呼ばれ、ケルトに狂信的に執着する人々である。

18世紀に言語系統分類が自覚されはじめ、19世紀に精緻化されて、ケルト諸語という分類が誕生する。この中で、ケルト文化圏と今日いわれる地域の同族としての連帯意識が生まれるのである。

歴史的に考えると、近代になって構築された概念ということも言えるので、ケルトという括りが幻にすぎない、捏造である、というような主張が近年生まれている。特に英国では、隣国アイルランドがケルトを民族的アイデンティティの拠り所のごとく考えているので、1990年代、その主張がかなりの説得力をもった。しかしながら、ケルト諸語と括られる諸言語が、言語的に親縁性

をもつことは確かであり、これをもってケルト諸語文化圏ととりあえず規定しておくことは、大方の理解を得た見解とっていいように思う。

1. ケルト諸語

ケルト諸語には、いくつかの分類の仕方があるが、大きくいうと、大陸ケルト語と島嶼ケルト語という分類がまずある。大陸ケルト語は古代のギリシア・ローマの時代に存在した言語である。イベリア半島のケルト・イベリア語、イタリア半島北部のレポント語、小アジア、今のトルコに居住したガラティア語など、大陸ケルト語として認定される言語の証拠は欧州各地にあるが、どれもその証拠はわずかな碑文や地名などに見いだされるにすぎず、言語自体の研究もあまり進んでいないとっていい。唯一、比較的多くの史料が知られているのが、現在のフランスに相当する地域に広がるガリア語である。ギリシア文字、ラテン文字の碑文が数多くあり、近年でも数年に一度は新たな石版が見つかっている。したがって、ガリア語についてはかなり研究も進展した。現在では、大陸ケルト語のなかでは、ほかの言語と異なり、むしろ島嶼ケルト語、それもブリテン島系統の言語と類似性があることが認められている。したがって、大陸ケルト語と島嶼ケルト語という分類では、ガリア語が中間的位置にくることになる。

さて、島嶼ケルト語だが、従来、紀元前1000年紀（だいたい前6世紀から前3世紀）に、大陸からブリテン諸島に渡来したという説があったが、現在は、おそらく新石器時代（紀元前3000年紀以前）からの継続的居住で、文化的に大きな断絶はなかったという説が有力になりつつある。そうすると、インド＝ヨーロッパ祖語に直接つながる起源も考えられることになるが、いずれにしても、島嶼ケルト語は早くから大陸ケルト語と分岐し、独自の道を歩んでいたことになる（図1、2、3）。

島嶼ケルト語は、ヒベルニア（アイルランド）島のゲール語系と、ブリタニア（ブリテン）島のブリトン語系に分類できる。

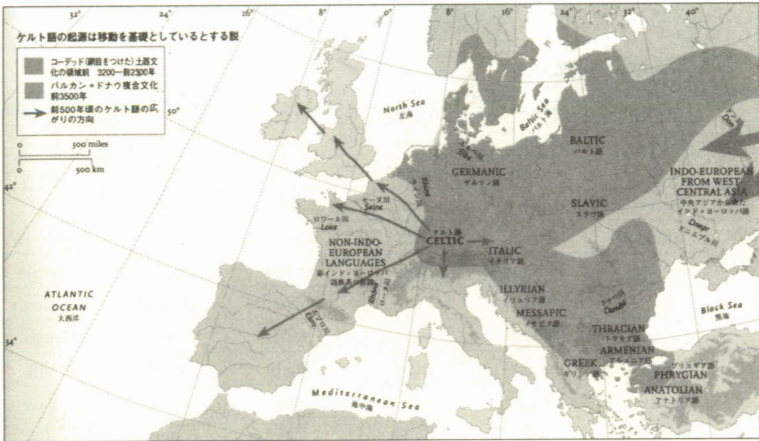


図1 ケルト諸語伝播説 (従来の説)

(ヘイウッド『ケルト歴史地図』東京書籍より)

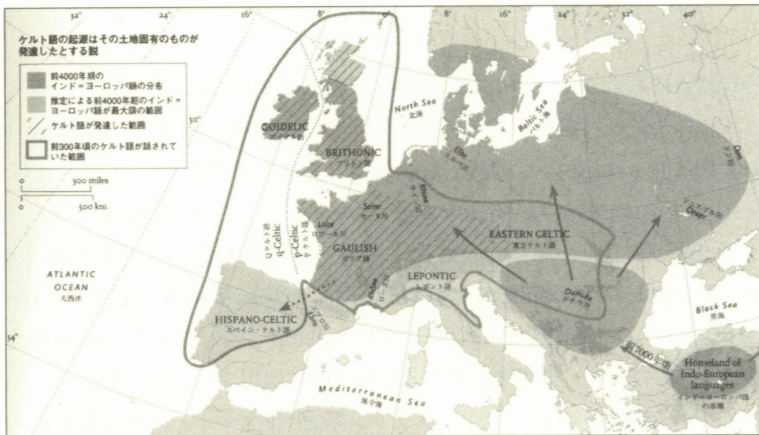


図2 移動を伴わない文化伝播説 (レンフリーなど)

(前掲書より)

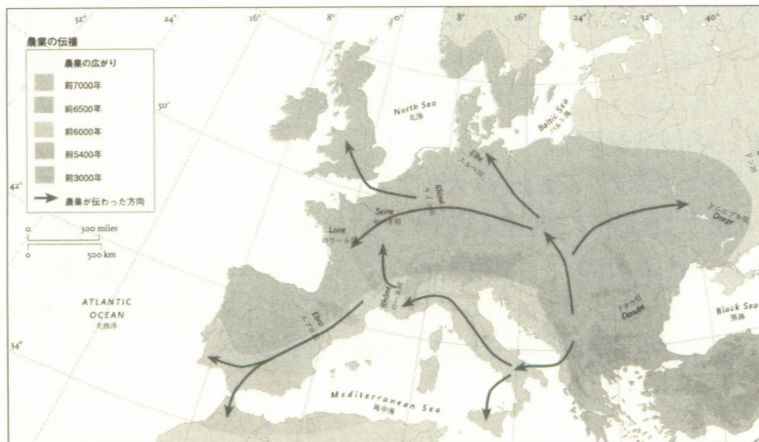


図3 印欧語の伝播と農業(新石器文化)の広がり

(前掲書より)

	Gaeilge	Gaelg	Gaidhlig	Brezhoneg	Cymraeg	Kernewek
1	a haon	nane	aon	unan	un	onan
2	a do	jees	dha	daou	dau	dew
3	a tri	tree	tri	tri	tri	tri
4	a ceathair	kiare	ceithir	pevar	pedwar	peswar
5	a cuig	queig	coig	pemp	pump	pymp
6	a se	shey	sia	c'hwec'h	chwech	hwegh
7	a seacht	shiaght	seachd	seizh	saith	seyth
8	a hocht	hoght	ochd	eizh	wyth	eth
9	a naoi	nuy	naoi	nav	naw	naw
10	a deich	jeih	deich	dek	deg	deg

上の表で見るように、1は英語のone、3は英語のthreeによく似ているなど、インド＝ヨーロッパ語族として同族であることがわかる。また、Gaeilge（アイルランド）、Gaelg（マン島）、Gaidhlig（スコットランド）はともにGael（ゲール）が語幹であり、Brezhoneg（ブルターニュ）、Cymraeg（ウェールズ）、Kernewek（コーンウォール）とは明らかに異なる。ゲールと後者の3言語の違いは、4（Gaidhligではceithir（ケヒール）、Brezhonegでは、pevar（ペヴァール））、5（同様にcoig（コイク）とpemp（ペンブ））でわかるように、前者では、Kの音が、後者ではPの音が対立的に出現することである。この特徴から、ゲール系を「Qケルト」、ブリトン系を「Pケルト」と呼ぶ場合がある。

ゲール語系はアルカイックな屈折系をもつので、古く（おそらく紀元前）から独自の発展を続けたと思われる。一方、ブリトン語系は、ガリア語との接触はローマ帝国時代も続いていたと推定され、それがガリア語との言語的親縁性を生んでいるようだ。カエサル「ガリア戦記」にガリア人とブリトン人との交流を示す記述がある。

ヒベルニアのゲール語を話す人々は、ローマ帝国時代にスコット人と呼ばれていたが、3世紀から5世紀にかけて、たびたびブリタニアに侵攻した。その北部を占領した人々が、今日のスコットランド、スコット人の土地を築くことになる。征服された人々は、ローマ人からピクト人、すなわち彩色人と呼ばれていた。おそらくこの名称は、刺青の習慣を表すものだろうが、このピクト人

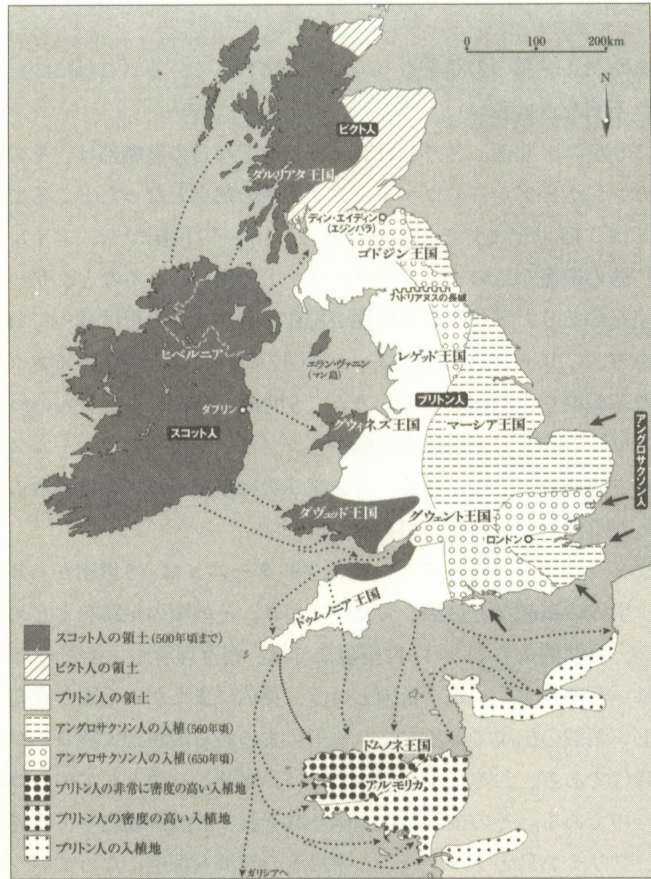


図4 ケルト文化圏の大移動

(拙著『ケルトの水脈』講談社より)

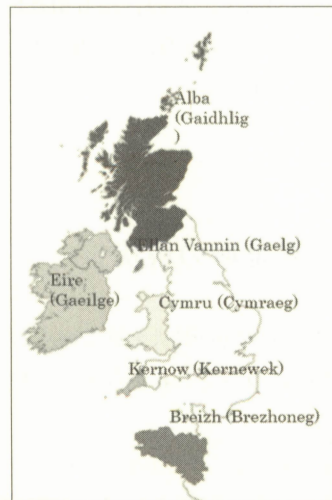


図5 ケルト諸語 (筆者作成)

もまたケルト系の言語をもっていたと言われていた（これについては異論もあり、不明な点も多い）。

ブリタニア北部、とりわけシェトランドなどの島嶼部は、その後、北方の民、スカンジナビアからのヴァイキング襲来の拠点となったところであり、マン島などは、15世紀までその足跡がある。16～17世紀でも、アイルランド（エール）語の聖書がそのままスコットランドで用いられるなど、ゲール語系は交流の記録があり、言語的な近接性が現在でもかなりの程度残っている。

一方、ブリトン語系は、ローマ帝国の時代には、現在のイングランド全域にわたる範囲を言語域としていたが、5世紀以降のゲルマン人の侵入により、まずスコットランドとの境界地域、カンブリアが現在のウェールズから分離して、ケルト語地域ではなくなる。カンブリアはウェールズの自称カムリーと語源はまったく同一で「同郷」である。

ウェールズとコーンウォール、ブルターニュは、5世紀から8世紀にかけては、聖人の布教など接触、交流がつづき、その頃の足跡をとどめる共通地名も多い。言語的にも11～12世紀頃までは、相互理解が可能だったようだ。12世紀はいわゆるアンジュー帝国という、英仏にまたがる王国が存在していて、ブリトン語圏の伝説であるアーサー王にまつわる伝説が大陸ヨーロッパに広まった時代である。おそらくこの頃までは、ブリトン語としての一体性が保たれていたのである。その後、英仏両国それぞれに王国が成立し、境界が明確になると、ブリテン島とブルターニュ半島との交流も疎遠になっていく。ただ、英仏海峡を挟んで対岸にあるコーンウォールとブルターニュは15世紀までは緊密な交流が続き、その言語も相互理解が可能だったようだ。16世紀以降、国民国家の元になる王国の支配が強まると、そうした交流も途切れるようになるのである（図4、5）。

2. 各地域の現状

次に各地域の現状を見ていくことにしよう。最初に現在のイギリスに含まれる地域について、北からスコットランド、ウェールズ、コーンウォールと進み、

マン島を経由して、独立国アイルランド、最後にフランスの一部であるブルターニュについて解説する。

2.1 スコットランド

英語での地名はすでに見たように、「スコット人の土地」を意味する。自称はアルバ (Alba) である。ラテン語だと白を意味するが、その語源はわかっていない。ほぼ北海道に相当する7万8,000平方キロの面積に500万人の人口を擁する。ただ、そのゲール語 (Gaidhlig、ガーリックと発音) 人口は約6万人にすぎない。

スコットランドは、北部のハイランド (高地) と南部のローランド (低地) に分かれる。伝統的ゲール語地域はハイランドであり、ローランドは伝統的に英語に近いゲルマン語系のスコッツ (スコットランド) 語 (Scots) が用いられた。スコッツ語はラランス (ローランド) 語という名称もあるが、17世紀以前、独立時代のスコットランドでは文章語としても用いられた言語である。スコットランドではむしろこの言語の権威が高く、大部の辞書も出版され、文学運動もその広がり大きい。とはいえ、ゲール語は英語との違いが大きいので、スコットランドのアイデンティティとしては、やはりゲール語を重視しているようだ。2004年に完成した自治議会の新しい議事堂でも、英語とゲール語のバイリンガル表記であり、スコッツ語は登場しない。

ブレア労働党政権の分権化政策の一環として、1999年に自治議会が生まれた。イングランドに対抗する自治意識は高く、独立への指向性をもつスコットランド民族党が、2007年以降、自治議会で第1党となり、政権を担っている。だが、過半数を持たない少数派政権であり、独立まで至るのはなかなか難しいようだ。

スコットランドで我々にとってなじみ深いのは、まずはバグパイプだろう。それとこの演奏につきまとう民族衣装キルトである。とはいえ、バグパイプ型楽器は、スコットランド特有のものというわけではなく、かつては欧州全域にあった。また、キルトも、スコットランドでの特有性を意識して一般化されたのは18世紀で、それほど古い民族衣装とはいええない。

産業革命のもとになった蒸気機関の発明者ジェームズ・ワットはスコットランド人であり、産業革命の拠点の一つがスコットランドだったことも間違いな

い。それに伴って炭坑業も18世紀半ば以降、たいへん盛んだった。思想家アダム・スミス、電話の発明者グラハム・ベルなど有名人を輩出しており、この時期以降、現代に至るまで、まさに現代文明を牽引してきたといっていだろう。こうした近代史ばかりでなく、1960年代から開発が進んだ北海油田も、イギリスではその精製はほぼスコットランドが独占しており、これも民族党伸張の背景となっている

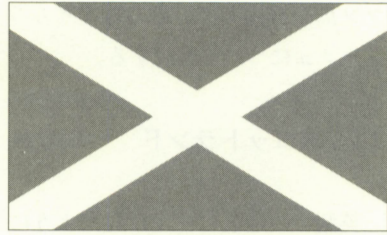


図6 スコットランドの旗
(以下、旗は「ウィキペディア」より)

宗教的にはプロテスタントとカトリックが拮抗していて、ウェールズのように、言語の用語の背景に宗教があるとはいえない。スコットランドの守護聖人、聖アンデレ（アンドリュウ）を象徴するのが、青地に白の斜め十字の入ったその民族旗である（図6）。

ゲール語が残るのは、ハイランドの、特にルイス島など、過疎化の進んだ漁村地域であり、そこに保存される民謡や民話が言語の保存にも大きな役割を担っている。18世紀のなかば、マクファーソンのフィンガル（3世紀とされるケルトの伝説的英雄）についての一連の作品（1860年代）が、その発端として記録されて、それは、西欧合理主義の反動として誕生するロマン主義の最初の作品といわれる。

2.2 ウェールズ

自称はカムリー（Cymru）である。ほぼ四国地方に相当する2万平方キロの面積に、290万人が暮らしている。ウェールズの旗は「赤い龍」（レッド・ドラゴン、ア・ゾライグ・ゴッホ）で、「赤い龍たるケルト人の勝利」を表しているという（図7）。カムリーの語源は「カム」（ともに）、「プロ」（郷）で、「同郷」である。「カンブリア」と同一の語源である。これはイングランド北部地方（現在の湖水地方など）であり、この地方がゲルマン人侵入以前は現在のウェールズと同族の人々が暮らしていたことを示している。6世紀に成立したと言われる文学作品には、この地域のウェールズ人が描かれている。7世紀以

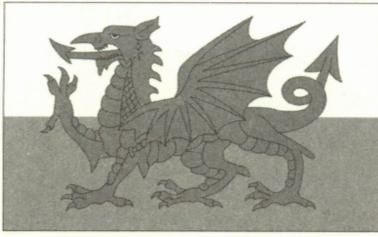


図7 ウェールズの旗

降、カムリー語話者は現在のウェールズに限定されるようになる。

中世のウェールズは群雄割拠の時代が続き、ウェールズ出身のヘンリー7世がイングランド・テューダー王朝を開き、ウェールズはイングランドの一部と認識されるようになった。1536年の合同法によって、法的にイングランドの一部となった。

伝統的には羊の放牧を中心とした牧畜が主産業だが、19世紀以来、ウェールズは石炭と鉄鋼業で潤うようになった。映画「我が谷は緑なりき」（ジョン・フォード監督、1941年）の舞台となった炭坑はウェールズ、特に南部地方の典型的イメージであり、そこに登場する男声合唱もまさにウェールズのイメージの代表である。

合唱文化は、18世紀、ウェールズにおける、プロテスタントのメソジスト・リバイバル（信仰復興運動）によって育まれた。ここでは同時にカムリー語が系統的に用いられたので、その言語保存にとってもこの運動は重要な意味をもった。

言語保存に重要だったのは、18世紀末に、ケルト復興運動のなかから誕生した民俗文化祭「アイステツズヴォッド」である。これは中世に行われていたとされる「吟遊詩人の会」の復活をうたっていた。ケルト復興運動というのは、キリスト教以前の文化としてケルト文化を考え、それを自らの文化の基層とみなして再興しようとする運動であり、18世紀にウェールズ、アイルランド、ブルターニュなどで始まった。19世紀後半には交流運動もさかんになり、そうしたところから、アイルランドの独立につながるような、民族運動も誕生することになったのである。

20世紀になり、農村地域の過疎化、さらには炭坑業の斜陽化が進展するとともに、カムリー語人口も減少した。それは欧州のどの少数言語とも共通するが、ウェールズでは1980年代にその減少に歯止めがかかった。カムリー語教育運動は、両大戦間期に始まるが、1967年の言語法により英語とカムリー語は法的に平等となり、1970年代には自主教育運動が軌道にのる。1980年

代の教育改革、また1993年の新たな言語法によって、カムリー語は媒介言語、教授言語としても用いられるようになった。ラジオ（ラジオ・カムリー）が1978年に、カムリー語テレビ（S4C）が1982年に開局した。

もっとも重要な画期は、1999年のウェール自治議会の開始である。これは労働党ブレア政権の分権化政策のなかで生まれた政策であり、スコットランドでは、3分の2が賛成したが、ウェールズでは、わずか1%の差で賛成票が上回り、実現したのであった。スコットランドに比べて、イングランドへの統合が200年近く古く、またチューダー朝以来、英国王室へのウェールズの組み入れがそれ以前からあり、文化的なイングランド化が相当進んでいたのである。教育においては、現在では、ほぼ100%の生徒児童が何らかの形でカムリー語に接しており、言語文化の復興は、ケルト諸語のなかでもっとも進んでいるといえる。西ヨーロッパの少数言語の中でも、バスク（自称はエウスカル・ヘリアないしエウスカディ）、フリジアと並んで模範的復興例として、よく話題にのぼる。現在のカムリー（ウェールズ）語話者は、人口の5分の1、58万人だが、今後、増加に転じるのは確実である。

2.3 コーンウォール

ほぼ埼玉県に相当する3,500平方キロの面積の中に、52万人が暮らしている。伝統的言語のケルノウ語は1777年、最後の話し手が亡くなって消滅したことになるが、ウェールズやブルターニュと共通するケルト復興運動によって、19世紀末以降、言語の復活運動があり、現在では数十家族の家庭言語であると言われている。その民族旗、黒地に白十字は、守護聖人、聖ピラン（ないしペラン）に由来する（図8）。

古くからイングランドの一部であり、歴史的に自立した地域とはいえなかったため、その同化は早かった。ケルト文化圏をイングランドが取り込む手段でもあった、コーンウォール公（イングランド王位の相続人）の創設が1336年であり、ウェールズ公（第一

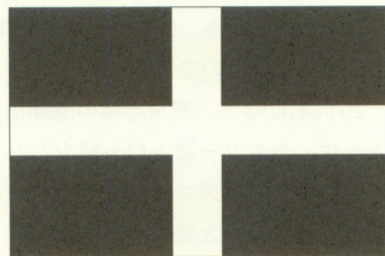


図8 コーンウォールの旗

王位継承者)の創設が1343年である。

コーンウォールで有名なのは、スズ鉱山である。18世紀までは主産業だったが、19世紀後半から衰退がはじまった。これを補ったのが、海岸の景勝地を中心とした観光客である。また、ティンタジェル城をはじめとするアーサー王関連の史跡が多いことでも有名で、これが観光に結びついたわけである。ティンタジェル城は、アーサー王ブームに乗って観光客を集めようと、1850年にこの名になったようだ。またピクシー、プカブー、ノッカーといった妖精など神秘の土地としても有名で、これも観光資源となっている。21世紀になって、コーンウォールとデヴォン州の鉱山景観が世界遺産に登録されて、これも観光資源となった。

ブルターニュのモン・サン・ミシェルと同一名称で、規模は小さいが同じような景勝地であるセイント・マイケルズ・マウント、同じくブルターニュの「フィニステール」と同一の意味の地名「ランズ・エンド」など、ブルターニュ地方とは少なからず縁がある。少なくとも15世紀までは交流がさかんで、ケルノウ（コーンウォール）語とブレイス（ブルターニュ）語は、少なくともこの15世紀までは相互理解可能だった。だが、ウェールズやブルターニュと異なり、独自性をもつ地域を構成しなかったので、その独自の言語も早くから衰退を余儀なくされたのである。

イギリスは2001年に、欧州地域語少数言語憲章を批准したが、2003年にその対象言語として、ケルノウ語とマン語を追加した。これによって、補助金が復興運動家団体に支給されるようになり、運動は公的な認知を得て、大いに盛り上がりは始めている。

2.5 マン島

淡路島とほぼ同じ592平方キロの面積に8万人が暮らしている。10世紀のヴァイキングの侵入から13世紀にかけてはノース人の王国の拠点であり、これが言語的にも影響を与えたようだ。ブリテン島とアイルランド島の間に挟まれ、両者との交流は古くからたいへん盛んだった。実際に、中央にある最高峰スナーフエル山（といっても600メートルだが）にのぼると、イングランド、アイルランドを望むことができる。言語的にもゲール（アイルランド）語とス

コットランド・ゲール語とたいへん近いが、その違いはこの中世の時代に形成されたようだ。特徴的なその民族旗「トリスケリオン」(三脚巴)は、13世紀のノース人最後の王、マグナス3世の紋章に基づいているという。三叉紋

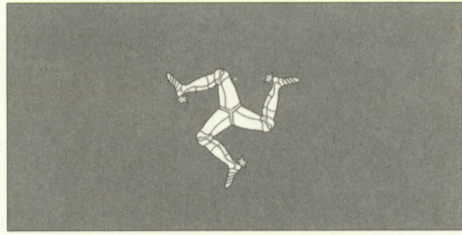


図9 マン島の旗

は、太陽光線、あるいは太陽の運行を意味しているようで、地中海文明にも現れ、必ずしもケルトに特徴的とはいえないようだが、「ケルト人の太陽」を意味すると理解されている(図9)。

15世紀にダービー伯の所有地となったが、18世紀には英国王室領となる。ノース王朝以来の自治議会の伝統は維持され、現在でもその「ティンヴァルト」は7月5日の「マン島の日」に象徴的に中心地で青空議會を開催している。

19世紀のマン島は英国と蒸気船で結ばれ、英国からの観光地として、潤った。狭軌の鉄道など現在でも観光客用に運転されるのも19世紀以来である。だが、19世紀末以降、観光地が大陸ヨーロッパなどに移り、経済的に斜陽化を懸念されるなかで始まったのがオートバイレースである。1907年に始まり、現在でも世界最大のオートバイレースの地である。年間、何度もレースがあるが、TT(トゥーリスト・トロフィー)レースという6月初めのレースがもっとも有名で、数千人のレース参加者がある。

マン島といえば、しっぽのないマンクス・キャットも有名だが、今は野生ではない。1990年代から「タックス・ヘイブン」(租税回避地)として、金融業、銀行などがその中心地ダグラスに集中するようになった。これによって、再び、マン島が経済的な活況を取りもどすことにもなった。

マン語は、1974年に最後の母語話者が死亡したとされるが、言語文化の復興運動は、ケルト文化圏のケルト復興運動の影響で、19世紀末から存在し、言語保存復活運動もその頃からあった。したがって、マン語は一度も滅びることなく、現在に続いているというほうが正確である。マン島議會「ティンヴァルト」でも象徴的に用いられ続けている。現在では1,000人を超える話者をもっているとされる。2005年には、マン語を教授言語とする小学校も誕生した。

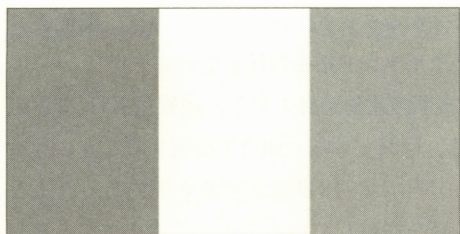


図10 アイルランドの旗

2.5 アイルランド

アイルランド島は、北方領土を含めた場合の北海道とほぼ同程度の8万5千平方キロを擁するが、その6分の5が独立国エール（アイルラン

ド）である。人口は450万人。ただし、連合王国領である北アイルランドを入れると600万人を超える。その旗、緑、白、オレンジの三色旗は、1922年の独立の際に採用されたが、緑はケルト、オレンジはオレンジ公ウィリアム、白は平和を表し、カトリック、プロテスタント、ケルト系、ゲルマン系を超えた一体性を象徴するものである（図10）。

ローマ時代にはヒベルニアと呼ばれていた。5世紀、聖パトリック（ラテン語でパトリキウス、ゲール語でポーリック）がキリスト教をもたらし、以降、中世末期の欧州の混乱期（5～7世紀）には、欧州のキリスト教の中心地として、文化的繁栄を迎えた。9世紀から11世紀はヴァイキング襲来の時代であり、12世紀からはイングランド、またノルマン人の侵入など大陸との交流が深まり、この中で、ゲルマン語系、またロマンス語系文化とも接触する。14世紀には一時的に英語の使用も始まるが、これは例外的で、中世までは、ゲール語とラテン語が書きことばであり、英語の侵入は、15世紀以降とっていいだろう。したがって、英語による「アイルランド」という名称もこの時代以降に限定して使用した方がいいように思われる。

16世紀にはブリテン島からの本格的な植民も開始され、これが本来、宗教的にはカトリック一色だったアイルランド島に混乱をもたらす原因となった。ただし、アイルランドが英国領となるのは、1801年の連合法によってであり、これまでは実質的に植民地状態の地域もあったとはいえ、名目上、独立国だった。

19世紀は、いわゆる大飢饉によって特徴づけられる。1841年代の国勢調査による人口は820万人だったといわれ、今日の2倍近くである。これが、40年代の大飢饉によって100万人が亡くなり、100万人以上が主に米国に移民した。

1840年代末の米国移入者の半数はアイルランド出身だったという。現代アメリカの人口の12%、3,500万人はアイルランド系を自任しているという。

19世紀末以降、独立を目指す民族主義運動が誕生する。民族主義は20世紀のケルト語圏すべてに誕生している。けれども唯一独立を達成することになったのは、アイルランドである。この理由は、18世紀まで独立国であったこと、19世紀に、ほかの地域にない大飢饉を経験していること、この2つが大きいだろう。

1916年、第一次大戦中の最中、「ダブリン蜂起」は失敗に帰すが、これが大戦後の独立運動につながり、1922年、アイルランド自由国の成立となる。第二次大戦中は中立を保ち、この点でも英国とは一線を画した。

第二次大戦後も経済的には貧しく、1980年代まで移出民は継続した。状況が変わるのは、1990年代、特にその後半であり、「ケルティック・タイガー」と言われるほどの経済成長を実現した。だが、2008年以降、リーマンショックによる落ち込みで、2010年には危機的状況に陥っている。

1922年の独立以来、その象徴としてゲール（アイルランド）語が存在し、1937年の憲法では、国名はエールとなり、ゲール語は国語、第一公用語と規定された。英語は依然として現在でも、日常的言語として普通の暮らしの中で用いられているが、憲法的には第二公用語である。ゲール語使用地域「ゲールタハト」では、保護政策が取られているが、2003年に成立した公用語法によって、ゲール語が少なくとも英語と同等以上に用いられるように、さまざまな施策が行われるようになった。2007年には、アイルランド政府の要求によって、ゲール語はEUの公用語となった。

国勢調査によると、166万人の人々がゲール語能力を持つと回答しているが、日常的使用者は、ゲールタハトを中心として、4万人から8万人と見積もられている。使用可能な人々と現実に日常的に用いている人々との、この統計的な大きな落差が、おそらく、アイルランドにおける言語政策の失敗、と考える研究者を生んでいる。

アイルランドといえば、普通の日本人でもギネスが思い浮かべられるほど、アイリッシュ・ビールは日本で受け入れられている。ネットで見ると、東京だけで100軒近いアイリッシュ・パブが登録されている。それからアイルランド音楽だろう。アイリッシュ・ダンスも世界中に愛好者をもっているし、ハーブ

やフィドル、ボウラン（バウロン）といった楽器も有名である。1990年代以降、日本でもチーフタンズ、クラナド、エンヤ、リヴァーダンスなど、たいへん人気がある。

2.6 ブルターニュ

「歴史的ブルターニュ」は、ほぼ近畿地方に相当する3万4,000平方キロに、430万人が居住する。第二次世界大戦中にその原型ができ、1950年代に「計画地域」としてはじまり、1972年に決定されたブルターニュ地域圏は、ロワール・アトランティック県を含まず、歴史的ブルターニュと区別して、「行政的ブルターニュ」と呼ばれている。この地域では、2万7,000平方キロに、310万人の居住する地域ということになる。

ローマ時代、ガリアの一部をなしたこの地域はアルモリカと呼ばれていた。今日のブルターニュよりやや広い地域だが、この名称は明らかにケルト語「海に近い地域」であり、ケルト諸語、それも大陸ケルト語のなかでは、ブリテン島系、すなわちPケルト語に近い人々の居住地だったと考えられる。ただし、今日のブルターニュに居住するケルト系の人々は、この人々が直接の起源をなすわけではなく、4世紀から8世紀にかけて、ブリテン島から移住してきた人々がその文化的出自になっていることが、考古学的にも形質人類学的にもまた、文献学的にも実証されている。とはいえ、第二次大戦後、プレスト大学の歴史言語学者ファルハン教授が、現在のこの地のケルト語は、実はブリテン島起源ではなく、ガリアの直接の起源、あるいは、ガリアとブリテン島の両者の混合の産物であるという説を唱えたが、今日の研究者にはこの説に賛同する人はほとんどいない。

ブルターニュは、語源的にはブリタニアである。これもブリテン島と同一の語源であり、その起源的同一性を明示するものでもある。実際に、10世紀、11世紀にはブリタニアは英仏海峡を挟んだ両地域を指し、あいまいな場合がある。この時期にフランス語によるブルターニュという名称も生まれた。

ブルターニュの自言語による自称はブレイスである。これもブリタニアと関係するが、起源はブリッティアであり、ブリタニアもブリット人の土地（ブリトン、ブリタンは複数形）というのが元だろうと言われている。とはいえ、ブ

リット自体の語源はわかっていない。紀元前4世紀のマッサリア（ギリシアの植民地マルセイユ）の旅行家ピュテアスがプレッタニケと記したのが、最古の記録だが、この意味は「刺青を持つ人々」すなわちピクト人（こちらも刺青人）と同一だという説もある。

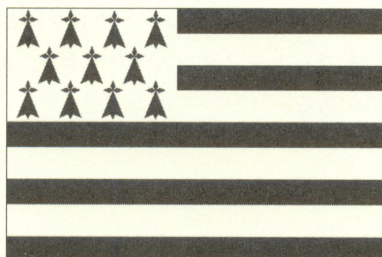


図11 ブルターニュの旗

ブルターニュは巨石文化の地としてよく知られている。なかでも10列ほどの柱状列石が1キロ以上も続くカルナック（モルビアン県南部）の遺跡は有名である（紀元前3000年紀）。

現在に続くブルターニュの歴史的起源は、4世紀から8世紀に至る、ブリテン島からの移住である。これについては数十にのぼる聖人伝が、その後9世紀から11世紀にかけて著され、今日の9つの司教区の基礎が作られたことになっている。現在用いられているブルターニュの旗は、20世紀前半の民族主義運動の中で誕生したものだが、そのモチーフは、9つの司教区（黒白の横縞）と、ブルターニュ公の紋章である「エルミーヌ」（動物の白テンの毛皮の様式化）である（図11）。

ブルターニュの起源として語られるのは、9世紀の王ノミノエだが、実在であったか、確証はない。10世紀の最初の公として登場するアラン・バルブルトは実在の確証があり、以降、ブルターニュは公が領主となり、今日の地域がこの当時確立するのである。

ブルターニュは以降、16世紀まで独立を保つが、1532年、フランス王国の領土となる。この時の領主が女公アンナ・ブレイス（アンヌ・ド・ブルターニュ）である。フランス国王シャルル8世、その死去の後には、フランス王位継承者であるルイ12世と再婚した「悲劇の女性」として有名で、なおかつブルターニュの守護聖人アンナ（聖母マリアの母）と同一視されて、信仰の対象ともなった。

この時期のブルターニュは、カナダを「発見」（1534年）したジャック・カルチエなど、船乗り、海運業が有名であり、産業が発展するのは、むしろ16世紀後半から17世紀にかけて、フランス王国に併合されてからである。

ブルターニュはカトリックの土地であり、これはフランス革命期の「反革命王党」(シューアン、フクロウ党)の地としても有名である。保守性と伝統の保存が結びつき、19世紀後半には、それが観光産業ともなっていく。「プロセリアンドの森」(イル＝エ＝ヴィレンヌ県西部)など、アーサー王伝説関連の観光地もこの時代以降、整備されていく。

ブルターニュというと、その独特の民族衣装、そば粉のクレープ(農民の日常食)、民族舞踊だが、こうしたイメージは観光産業の発展のなか、19世紀末から20世紀初頭に確立した。今日では先端的産業もあるが、伝統的にはやはり、農民、漁民の土地である。とりわけ沿岸漁業、養豚、養鶏などがいまでも主要産業である。

19世紀後半から地域的アイデンティティの自覚はフランスの諸地方のなかでも強力で、その運動をリードしていた。19世紀末には、地域主義運動が生まれ、第一次大戦後は、民族主義運動が誕生する。ただ、その運動が反フランス的傾向からドイツと結びつき、人種主義的思想も見られた。これが第二次大戦中の対独協力派につながり、大戦後は、長らく、ブルターニュ民族主義がタブー視されることになった。これは、私が学生としてブルターニュに留学した1980年代でもそうだった。

しかし、1970年代以降、エコロジー運動などと結びついた新しい地域主義運動によって、古い世代とは一線を画す運動が広がるようになった。ブレイス語の自主教育運動「ディワン」などは、西欧のほかの少数言語と共通する運動であり、民族主義とはあまり結びつかないのも特徴的である。

1980年代、社会党政権のもとで、分権化政策、地方文化の振興政策の一環として、ブレイス語の学士号などの大学免状、また、中等教育資格試験免状などが認可され、「ディワン」などバイリンガル教育課程も、公的な認可を受けられるようになった。

ただし、政治的に大きな自治権を備えた自治議会を獲得しているウェールズやバスクなどと異なり、その地域圏議会の権限は限られているので、言語教育はそれほど進んでいるとはいえない。2000年代には、フランス語ブレイス語のバイリンガル教育を受ける児童生徒は1万人を越え、言語教育が軌道に乗りはじめたとはいえるが、バイリンガル教育を受ける子どもたちの割合は、多いところでも児童生徒数の4%ほどにすぎず、20%を超えているウェールズや、

80%を上回るバスクなどと比べると進んでいるとはいえない。とはいえ、フランス国内の少数言語としては、その活動はもともと活発だといっていいだろう。

こうした言語文化を支えているのは、音楽文化である。伝統的な音楽、語り歌や踊り歌は「フェスト・ノース」(夜祭り)として戦前から盛んだったが、戦後も衰えることなく、継承された。1970年代には、こうした中から新しい音楽、ワールドミュージックに通じる音楽家やグループが誕生し、それがブレイス語と結びついて、音楽的な活況を支えることになった。毎年7月下旬にケンペール(カンペール)で開催される「コルヌアイユ(ケルネ)・フェスティバル」、8月上旬にアン・オリアン(ロリアン)で開かれる「インター・ケルティック・フェスティバル」は、こうした音楽文化を基盤に、30~40万人の観光客を集めている。

音楽文化はおそらくケルト文化圏に共通する大きな財産であり、活用すべき資源である。これが元になって、若者が自らの言語を学ぶ動機となっていることもある。踊りや歌が唯単に伝統的なものばかりではないので、若者を引きつける内容をもっていることは、文化的創造性を考えるうえでも重要であり、これこそケルト文化圏の言語的活力を実証するものといっていいたいだろう。そうはいっても、その基盤をなすのは言語であり、そのすべてが現状では少数言語であるとはいえ、その活性化に奔走する人々があって、それが文化的活性化につながっているのである。

主要参考文献

- ジョン・ヘイウッド(井村公江監訳)『ケルト歴史地図』東京書籍、2003年
原聖『民族起源の精神史』岩波書店、2003年
原聖『ケルトの水脈』講談社、2006年